

昭和五十三年十一月二十七日

平泉 澄先生 午前の部(一)

平泉 構内に狐の出たことはベルツ先生の日記に見えております。ベルツ先生、リース先生、みんな同じ時分ですわな。お雇い教師はみんな構内に住んでいた、そこへ狐が出たんでしょな。

これは、余談みたいなものだけでも、私の学位が新学位令によった最初のものなんです。ここですっかり判が違うでしょう。私はすべて旧制度と新制度のかわり目におったんです。これはこういうものです。つまり、学位論文を提出して学位を得る。その論文は必ず公表して天下にこれを示さなければならぬという規則になっていたでしょう、その最初のものがこれなんです。

このときに一緒に学位を得た人は、歴史のほうでは仏教のほうの鷲尾順敬さんです。ところが鷲尾さんは旧制度なんです。なぜそうかわかりませんが、この制度が始まる前に論文を出しておったのでしょう。だからあの人は旧制度でさばかれ、わしは新しい制度によって提出して、新しい制度によって与えられた。鷲尾さんのは公表されておらんです。

当時、鷲尾さんの言葉としてわしが聞いたのは、自分らは旧制度なんで、ほんとうの学位というのは平泉だ、あれがほんとうのものだと歎かれたというのを聞きました。大正十五年。

○ その二日後が助教授の辞令ですが、これは何か関係があるのかな。

平泉 講師が決定したときに美濃部達吉博士が私を招いて、きみに何としても九州へ来てもらおうと思つて、私は実は松浦鎮次郎さんにも話をして努力しておったんだが、もうこれではつきりしたからと言って断念された挨拶がありましたかね。

それから土田さんは学生主事ですね。

○ 昨日間違えたんですが、土田さんが学生主事だったのは昭和の十年代ですね。七、八年からだと思ひます。だから、もつと前から学生部におつて。

平泉 何でしょう。そうすると何かそういう名前があつたんですね。

○ 学生監という役目はあります。

平泉 それでしょう。

○ なつておられたんですかね。

平泉 学生監でしょう。それからあの人は神宮皇学館の教頭になつていくんですね。その時分の皇学館の学長はおそらく上田万年先生でしょう。東京から兼ねておられた。そこへ採られたのだろうと思ひます。

私の留学延期の願が出て、それが許可されたのはいつですか。

○ 昭和五年七月十日に、「ギリシア国及びアメリカ合衆国在留をここに追加す」というふうにあります。

六年三月二十四日、在留期間を昭和六年六月三十日まで短縮。これは文部省からです。

平泉 今日はず短縮したのかということからお話ししようと思いますが、その前に予感とか予知、洞察という話をしようと思えます。今の研究の仕方を私は好まない。今のは見ておると、どこそこの雑誌、何年何月号の何ページから何ページまでに、こういう論文が載っておつてこうだ。その次にだれとかというふうには、データを集めるのに狂奔しておるでしょう。間もなくどうにもならないことが起こるだろうと思うのは、百あまりある大学でみんな紀要を出し、雑誌を出し、そのほか無数の雑誌が出ておる。それに関連した論文をみんな集めてそれを読んでおると、若い者はそれだけでヘタヘタですわ。何かデータは集まる。ところがこれがいわゆるデモクラシー方式なんですわ、数さえ多ければよい、多数決でいくというようなことになりましょう。

研究というのはそういうものではなくて英知ですわ。私の日光廟の研究でも、なぜ道が開かれたかというところ、ずっと昔からある幕府の記録、それから明治になってからの研究を見ておつて、それらの研究の基礎になっている古文書があるんですが、その古文書を見てこれは偽文書ではないかと感じた。そこでこれが偽文書かどうかの鑑定を始めて、これは偽文書だ、それならほんとうはどうだというので入つていったんです。あれはデータを集めていたら何もできる

ものではないんです。

それからこれは非常におもしろい話で、不思議なくらいですが、大正九年、私の年は二十六でした。そのとき三上先生が私を呼ばれて、仕事をひとつ手伝つてくれないかとおっしゃった。私はとにかく親の言いつけはどんなことでも聞く、それから恩師のおっしゃることは大体従う。これは私の原則ですから。自分の気持ちがあるんです。かしこまりました、どんな事でしょうと言いましたところ、滋賀県に日野という所がある。そこは蒲生氏郷の郷里で有名な所です、売薬もあるんです。そこに綿向神社という郷社があつて、それを県社にしたいという希望がある。町は葉でもうけているから金は持つている。その連中が金を出して県社の出願をしたいが、そのためには由緒がなければならぬ。その歴史研究を三上先生に頼みに、町長をはじめ町の有力者がずらつてきたので、先生は引き受けられた。しかし、自分ではできないから、おまえ、これを調べてくれとおっしゃった。かしこまりました、何か材料はありますか。向こうから持つてきたのはこれだけだと、風呂敷に包んだものを出されて、これで全部だそうだと、これで調べてみてくれといわれた。

かしこまりましたということ、それを調べて見たところが、全部それは徳川の末期、文化、文政、天保、安政というときのものばかりなんですわ、記録及び文書がある。しかし、由緒になるようなものはその中には一つもない。

ところがそれを見ておつて、はあ、これはおもしろいと、私はピンときたんです。このお宮には何か重要な記録が残つておるとい

うことを考えて、三上先生に、先生、この間史料はいただきましたが、私の察するところ向こうの神社自体にはよいものがまだ残っていると思います。彼らはそれを知らないんです、行って調べてみようと思います。わかった、行ってこい、自分のほうから行ってやるということ、先生のほうから向こうへ連絡してください。それで私は行ったんです。

そうすると向こうでは三上先生を目標に考えておるものだから、三上教授の代理がくるというので、町長をはじめ町の主だったもの、氏子総代、社司など、全部で十五、六人が駅へ迎えてきた。ところが私は当時数えで二十六。非常に若いので、向こうはげんな顔をして、よくおいでくださいましたというものの、私の顔ばかり見ている。

それからとにかくみんなに案内されてそのお宮にいった。社務所は大きな座敷が二間続いてあって、そこでみんなに話をした。お宮には必ず古いものがまだ残っておると思うから、どうか全部出して見せてください。何もございませんという。いや、あるんです。必ずあるに違いない、皆さんそれをおわかりにならないだけだから、よいものか、悪いものか、古いものか、新しいものか、皆さんはご承知ないはずだ、何でもいいから出してください。皆さんには紙くずだと思われましょう。その紙くずを出してくださいという交渉をしたんです。

みんなはどうも腑に落ちない。またしては私の年を聞く。先生、おいくつなんですか。数えの二十六ですが、いうとますます軽蔑し

よるから、年はいいから、とにかく物を出しなさい。いや、ないんです。あるんだ。それでとうとう向こうがかんしゃくを起こして、おい、紙くずでも出せといわれるから、紙くずを出せということになったんですよ。

そうするとお宮があつて、社務所があつてずっと離れてこの辺に物置があつた。戸がない、屋根だけの物置で、そこにお祭りのときに使うようなものが横に積んである。その高いところに棒を一本通して、その棒に竹籠で畳一枚の大きさのものがぶらさがっている。大阪では火事のときにそういうもので物を持ち出すんです。簡単に軽いし、家の中のものを投げ込んで、二人で持ち出せるようなものでその籠が二棹ある。それにいっぱい紙くずが入っていたんです。

実はこれは紙くずでございます。二、三日うちに紙くず屋がくるはずで、紙くず屋に払う約束をしております。しかし、紙くず紙くずとおっしゃいますから、しかたがない、紙くずを出しますと言って持ってきたんです。私はびっくりして、これはえらいことになったと思いましたが、それを顔色には出さないうで、わかりました、その紙くずを座敷のまん中へあけてくださいといったんです。座敷が二間になつている、次の座敷のまん中へ紙くずをあけたんですよ。高さはこれくらいのものですわ。それで畳一枚これくらいだから、ずいぶんの紙くずが入っている。それを山と積み上げた。それからこれをわしが選択を始めたわけですが、困ったことにはほんとうの紙くずなんだ。女の人が髪を梳いて、あと櫛を拭うでしょう。その紙をポイとやったので、開けて見ると髪の毛が出てくるとか、学校

で子どもが天地と書いたような手習いの草紙が入っている。それをだんだんとやっておった。山と積まれたものを全部細かく見ていたが何もない。どうぞ、これを元のところに入れてくださいと、みんな元へ入れてくださいとみんな元へ入れて、次の籠を出してくださいと出してもらって、だんだんやっていった。みんなは何が出るんだろうというので、非常な興味で私の周りをぐるっと取りまいて見ておった。何も出ないのでみんながあきれて、向こうの座敷へ行って碁を打ちだした。私をばかにしきった態度だったんです。私の周りに五人ぐらい残っていましたかね、それがただ立って見ておる。だんだん見ていつてあとこれほどになったんですよ。

私も内心、これはだめかいなという気もしたが、倦まずたゆまずやった。そうしたら蒲生氏郷が出てきた、天正ですわ。出たぞと言ったらびっくりして、向こうで碁を打っていたやつは碁盤をひっくり返してバタバタとやってきた。何ですか。これは蒲生氏郷だ、四百年前だ、こういう大事なものがあるのを皆さんは知らなかったんだ。そこでみんなはびっくりして、そういうものが出ましたかというわけです。

それから出るわ出るわ、そのときに数十通出たんですが、皆戦国時代の永祿と天文とかその辺の古文書がずらっと出たんです。整理して伸ばして積んでいくとこれくらいになる。これはみんな知らなかったんですが、わしがもし一週間遅くすれば、紙くず屋へやられて燃えてしまうか、梳かれてしまうところだったんだと言ったんです。そのときはみんながわしを神様のように見て、非常な感嘆で、

今度は彼らのほうから願ひ出た。先生、私の家に紙くずがございすのでとおっしゃるから、あんたんとこのはだめじゃ、それはほんとの紙くずじゃ。(笑) これは恐るべき勸ですわ。

この話を非常に面白がって聞いて、皮肉を言ったのは幸田露伴先生。出たからよかつたが、出なかつたときの平泉の顔が見たいといわれた。何ともいえぬおもしろい話でしょう。どういうわけであんなことになったのか。いまそのお宮では古文書を画帖に貼りまして、そういうのが何冊かできています。そういうことがありましたが、勸というのは非常に大事です。今の学問というのは勸をすべて殺すようになっていく。

それから私は、学生の答案というのは非常に慎重に見るんです。これはその人の運命に関するんですからね。評点を付ければそれがやっぱり動かすべからざるものにもなるんですから、非常に慎重にする。いちばん苦労したのは高等文官試験、今の上級国家公務員の試験です。これは内務省や大蔵省、外務省の官吏になって一國を肩に担うんですから、これにあがるか、あがらんかというのは大変なことなんです。それが私の試験委員の時分には三千人ぐらいの受験者ですが論文試験です。内閣の小使いが行李に担いでくるんですが、それが六杯ぐらいあるんです。何がつらいといつてもその試験委員ほどつらいものはない。それをずっと見ているでしょう。十八年ぐらいですわ。

○ 臨時委員か。

平泉 あれは臨時委員です。

○ いつも臨時委員ですか。

平泉 臨時委員です。

○ それでは昭和十七年からですね。

平泉 これは、七十点台は心配ないんです。合格はするが優秀ではない。満点は付けてくれるなという内閣の指示があつて、満点はないんです。先生によつて満点を付けられると困る人がいる。先生によつて評点がまちまちなんです。ある人が満点を付けると、その人がよくできない人でも、ほかのものが引き上げられるでしょう。そこで八十点を上のほうとするという内規なんです。これはいわんほうがいいんでしょうけれども。

そこで七十点ならいいが六十点未満のものは捨てられるんですから、私は二度見た。八十点は、ほかのものが悪ければそれで引き上げていくから、これも二度見る。そういうときでもひとつの勘ですね、これはこういう人だという人柄がわかるんですよ。そして上に通つたものが、その次に口頭試問で出てくる。それは実におもしろいですね。全部が私のところへ出るわけではないからわかりませんけれども、見てみると人柄というのはよくわかるんですね、十七、八年前までですと各地方官で、警察本部長とか、裁判官でも要職にみないました。それはみんなわしの試験を受けた連中ですわ。

ところがあるとき、大学で非常に不思議なことが起こつた。国史学科の卒業試験のときに卒業論文の評点をまず付ける。その次に口頭試問がある。評点を付けたときにある学生の評点を投票した。辻先生、中村孝也さん、それから助教教授で当時おつた坂本太郎氏、私

の四人で、紙に書いて出して開けるんです。

○ 点数ですか。

平泉 甲乙丙です。そうしたら、辻さんも中村さんも坂本さんも甲を付けておる。わしは丙なんです。これは開きがひどすぎるですわな。乙ならちよつとしたところでそうかと考えられるが、一方は甲で一方は丙なんです。そのときはみんな平泉はひどい点を付けたいうので、あつと声を立てましたよ。わしは何もいわなかつた。

それから一週間ほど経つと口頭試問になつてその学生は出てきた。それで文書を出して、この文書を読んでごらんと言つた。それは彼が論文の中に引用したコメントですが読めない。それで今度はみんながびつくりして、あれが読めないのかというんですよ。そこで私は言つたんです。皆さんは論文試験のときに甲をお与えになつたが、私は丙を与えたら、皆さんは非常に驚かれた。あの論文を私は本人の実力とは違つたと判断したと言いましたら、三人ともその件はぐうの音も出なかつたんですよ。他人のものを引つぱつたか、他人の力を借りたか。本人の力ではないという判定なんです。

それからいろいろな話をしますが、世にも不思議なことは、あるとき修学旅行で奈良へ行つた。明日出発して奈良へ行くという前の晩の夢に、こうもり傘を盗まれた夢を見た。そのこうもり傘は新しくいいこうもり傘だつたんですよ。それが盗まれたという夢を夜が明けてから話したら、家内は盗まれたら大変だというんで、こうもりの柄に平泉と彫り込んだんです。それを持って行きました。私は学生には一週間の内には雨も降るから傘を持ってといつていた

が、最初に葉師寺へ行つて金堂へ入る前に学生みんなが傘を持って来たから、それを束にして、金堂前の茶店に預けた。傘立てにいくりにして入れて私のはそのいちばんまん中に入っていた。それから金堂の中の仏さまをずっと拝んで出てきて傘を受け取ったが、私の傘だけがないんですよ。店で聞いても知りませんという。そういう運命にあつたんです。

もう一つはこういうことがある。これは年をはつきり覚えていませんが、昭和十七年前後ですが、歌人の川田順さんから手紙をもらった夢を見た。川田順さんと私とは交渉がないから手紙をもらったことも一度もない。それが川田さんから手紙をもらったというのは、実に不思議なことなんです。不思議な夢を見てな、川田順さんから手紙をいただいたんだと言つて朝ご飯を済ませ、九時ごろになつたら郵便配達があつて、見たら川田さんの手紙が入っている。それは福井の藤島神社にお参りして、お祀りしてある新田義貞公の昔を偲んで、新田公をたたえた歌が五首ほどありました。福井へきて新田義貞公を偲んでこういう歌を詠みましたというんで送つてくださった。それで私はお歌をありがとうございますと川田さんに礼状を書いて、実は不思議なことで、お歌が着く数時間前に夢の中でこれを見たんですと申し上げました。

川田さんのそのときの返事は、葉書でしたけれどもいい歌でした。

藤島の神もやけだし告げにけん夢てふものは奇しかりけり

おそらく新田義貞公がお知らせになつたのだろうが、何と夢とい

うのは不思議なものだろうという歌です。

重大事をいうと人は信用しないで、むしろ不思議がるが、ほとんどみんな予見しうるんです。これは凡人の思い及ばざるところがある。言つたところで、そんなけつたいなことがあるかと思うだけでしようね。とにかくわかる。これはいうと都合が悪いから言ひませんけれども、いちばん驚くことは、ある人とすれ違つたとき、あの人は三日以内に乗物でけがをするという予感がしたが、あなたに三日以内にけがをしますよとは言えるものじゃない。いうべきではないと思つて黙つておつた。その人はその日に電車から放り出されてけがをした。それなら初めに言つてくれればいいじゃないかといわれるかもしれないが、それはとても言えるものではない。

それからいつ死ぬぞということも、私がいうと不思議だけれども、福井に妙心寺派の大安寺という寺がある。由緒からいうとちと兄弟分の寺ですが、元禄のころ大愚和尚の書かれたものが宝物である。言葉は明確に覚えていないが、死亡前三日これを書すとあつてそのとおりの後三日で亡くなつた。昔から優れた人は俺はいつ死ぬということを予言しうるんです。

大体、重大な仕事というものはほんとうをいうと、予言しえないものができるはずはない。先がわかるからそれぞれ処置ができるんです。それが今の考えでは、とてもそんなことは話にならない。

ところで、私自身の考えからいうと、日本は衰亡期に入つておるといふ重要な時期にきておる。下手をすれば国家土崩瓦解するところへきておるといふことを、中学時代から強く感じておつた。その

もとをなすものは幸徳秋水の大逆事件です。明治天皇さまを暗殺しようとする計画で、それには男も女も大ぜいおつてそれに協調するものもずいぶんおる。これが明治四十四年に公表されたんですが、非常な驚きでした。当時私は十六歳ぐらいでしたが、日本の国は非常に不健康で、いつどのようなことになるかわからない状態だという判定をした。見ておるとまことにそのとおりである。だいたい日露戦争に勝ったあの時分から、内実は腐敗してきておる。

それは大学の様子を見ておるとわかりました。新人会の連中でもその先蹤をなすものをずっと見てくると、みんな日露戦争の前後から大転換しておる。重大な一人は岩波茂雄です。これなんか前には吉田松陰先生や大西郷を崇拜して、非常に純日本的な行き方をしておつたが、それが日露戦争の時分から大転換をして、共産主義、社会主義の方向に向かう。同じ動きをしたのが河合栄治郎さん。あの人の伝記を見るとそうですよ、前にはわれわれと同じ行き方だったが、それが日露戦争の時分からグラッと変わった。そして彼はイギリスへ行つて、ある学者から、日本の青年は今どんなことを考えておるのかそれを聞きたい、その例としてあなた自身の考えを聞きたいといわれ、そこで自分の考えをずっと述べたんです。それをじっと聞いておつた向こうの学者の批評を、彼自身が書いておる。

それは、日本の青年、学生は何というすばらしい西洋文明の理解者であつて西洋の学術、文明をとり入れ、それを完全に吸収しておる。そのすばらしさに驚くと同時に、日本自体の伝統というものは、ここには微塵もかけを宿しておらぬ、ということを驚かれたんで

す。

あの人は嘘をいわない、正直な人ですわ。その点は私も尊敬するが、正直に書いておる。われわれから見るとそれは赤恥ですわね。それを正直に書いて彼は恥ずるところがない。やつぱり西欧のほうへ変わつてよいんだという考えでしょうね。そういうふうになつておる。

そうしてその次の第一次世界大戦は日本を非常に毒した。第一次大戦では、ドイツ、イギリス、フランスその他は生死の争いをやつたが、日本だけは死闘ではない。日本は対岸の火災で、もしそういう言葉を人がいうのなら、言われても仕方がない。火事場どろぼうですよ。向こうでやつておる間に南洋を取り、取れるだけの利権を取ろうという立場でしょう。これは日本の墮落のもとである。そのときですよ、大隈内閣が二十一カ条を支那へ突きつけたのは。この態度などは私は弁解できないと思う。私は何でも日本のしたことは少しもいいとは思わない。あれは外務大臣は三井の婿の加藤高明でしょう。加藤高明が二十一カ条を突きつけたということは、日本外交の重大恥辱だと思う。イギリスもアメリカも向こうで戦争に熱中しておつて東洋に手を出すだけの力もない。そのときをねらつて支那から取るだけのものを取ろうという考えです。実際はそうすわな。これは弁解の余地がない。こういうやり方をした。これが日本の政治、外交、経済の一切を墮落せしめた。

日本はあるとき非常に船で儲けた。山下汽船はそのときの船成金です。彼らはその金で豪華な邸宅を構え、女をたくさんかつて逸楽

を極めておる。これは日本としては恐るべき恥辱の時代だと私は思うんですがね。そして今度はその報いが必ずくるはずなんです。英米はドイツが片付いたうちは日本を処置しようというところへ向かってくる。これはこのごろ非常に明確な証拠を得たので、私は今年になってからはじめてこれを断言し得るのですけれども、大東亜戦争のもとをなすものは大正十年、日英同盟が廃棄されたことです。廃棄というのは、同時に今度は全員が集まって日本をたたきつぶそうということなんですが、日本は知らない。その証拠はシンガポール築港に出てきています。シンガポールに龐大な軍港を構築して、大軍艦をここへ駐留せしめておくというのは、日本を目標とする以外に目標はないんです。アメリカは英国の同盟国、支那は問題にならない。相手は日本だけなんです。それが大正十年、日英同盟を廃棄すると同時にシンガポールの築港にかかって、龐大な予算を注ぎ込んだ。このときが日本は腹を決めなければならぬときなんです。それをそのあとずつと軍縮会議で、日本をやつつけるために軍艦を減らそうとした。戦う以前にまず軍艦を減しておけというのが英米の謀略で、それですつとやってきた。

私どもがちょうど助教教授でおった時分に、ワシントン会議、ロンドン会議といった軍縮会議がたびたび開かれていった。日本の国内では海軍の主流派は軍縮案賛成、わずかに軍令部だけが反対なんです、その軍令部は加藤寛治大将が軍令部長、次長が末次大将。これは新聞、雑誌で罵詈雑言されておって、海軍では主流派に立ってないんです。そして恐るべきことは、そういうときに日本の政治という

ものは、いわゆる政党政治でしょう。そしてどの内閣を立てるかということは、陛下の大権にあるというもののそれは表面で、実権は西園寺公にある。内閣が辞職すれば陛下はご自身でお決めにならぬいで、西園寺にお尋ねになる。西園寺は興津におつて、龐大な邸宅に美女を擁して優雅な生活をしておる。そこへご相談がある。すると西園寺のいうことは決まっておる。日本に政党が二つある、こっちがなかなかつたらこっちを立てる。こいつが少しのさばってきたら、こっちでこれを押える。両方ちゃんぽんに押えておれば国内は安全だ。これが西園寺の原則ですよ。西園寺さんは女を連れて第一次大戦の平和会議に行ったんですよ。

それを私は見ておつて、日本は大変なところへいくと思いました。西園寺という家は、鎌倉時代の承久の変は後鳥羽天皇、順徳天皇が幕府を討伐して、政権を朝廷へ奪い返して正しい日本の政治をとろうとされた。その運動に対して幕府が反抗して、天皇をみんな島流しにして幕府の政権を固めた。そのときに幕府に通謀して朝廷の計画を全部もらしたのが西園寺、これは吾妻鏡にみんでいます。

それからその次に、もう一度後鳥羽天皇、順徳天皇のご精神を継いで、朝廷に政権を回復しようとしたのが後醍醐天皇ですが、その後醍醐天皇に対して、北条高時と通謀して抵抗して、後醍醐天皇が建武の中興を成就して非常にお喜びである最中に、後醍醐天皇を暗殺して、もう一度北条の天下に戻そうとしたのが西園寺公宗で、これは太平記にでてくる。その子孫が西園寺公望です、彼は明治の初めに十八、九で山陰道鎮撫総督・北国鎮撫使になって行く。そし

て明治四年にフランスに行き、自由民権の思想にかぶれた。その思想的な盟友が中江兆民。この連中が日本に革命を起こして、民主国家にしようという運動を明治九、十年に始めた。それがどういふものか今は元老として、非常な富、奢りを極めておる。それによつて日本が指導されておるのだから、この日本はどう行くかわからない。日本は非常に危いということを思った。

それから私どもが高等学校を出る時分は、みんなどういふところへ行きたいかというところ、これも実に情けないことだが、第一の希望は銀行でみんな金が欲しいんです。何と情けない。男が金の番人をしてそれで一生を暮す。銀行の悪口をいうわけではないけれども、男としては男らしくない仕事だと思ふのに、有為の青年がみな銀行に入りたがる。軍というものを考えるものは一人もない。陸軍、海軍を有為な青年はみな侮蔑しておる。この傾向は恐るべきことです。そして政治のほうへ向かうものがあつても、政党政治を考えて、自分は何党だというようなことを、高等学校時分から言つておる。これは重大な状態だと私は見ておつた。

そのうちに、そんなところではなくなつて全部アカですわ。共産主義が入つてきた。これは実に何ともいへぬ状態で、それは高等学校の動きを見れば非常によくわかる。そして、高等学校がナンバーの間はまだまだいいんです。ナンバーでないのがでてくると今度はどこか落ちに落ちてくる。この状態を見て日本は非常に危ないと思つておつた。そのうちに外国へやつてもらうことになつて船に乗つた。これで私に非常な影響を与えてくれたのは、国内におると周囲の粹

がある、あるいはその空気の中にあるものだから本心を吐露しないが、外へ出るとみんな本心を吐露するんです。かりに言えば、女遊びをしたい男があつても国内では自分の親もあり、兄弟もおり、友だちや周囲が見ておるから大したことはしないが、外へ出るとその粹がないものだから、自由に勝手なことをするでしょう。それで身を持ち崩すものがある。周囲に国内ではいふことをはばかつたものが、外へ出ると非常に楽な気持ちになつて本心を吐露する。そこでみんながどういふ考えを持つておるか非常によくわかつた。

行つてゐるわれわれの仲間はいいてい助教授でしたから、それが皇室に対して尊敬の念を持つてゐるものはほとんどいない。もし革命運動が起つた場合には、自分はどちらへ銃口を向けていいか実はわからないということをつた。わからないということはそれだけでも大体わかる。

それなら陸海軍はしつかりしておるのかというとこれもそうではない。海軍の中佐でしたが、戦争になつた場合に自分の国を守るといふのはわかるが、なぜ皇室を守らなければならないのか。これはわれわれにはわからないというんです。軍人でありながら軍人勅諭というものを完全に忘れてしまつてゐる。これはどつちを向くのかわからない。

それから名前はずいといませんが、私が行つたとき、非常におとなしい京都大学の助教授で年は若い誠温厚な人で、人柄としてはほとんど申し分がない。頭も優れておる。これはフランスへ留学したがいい人だと見ておつた。ところがこれはあとでわかつた

んですが、ロシアからの指令で重大な指令は、全部この人を通じて日本へ入ってきている。こと重大なことはこの人を經由せずしては、信用するなということですから、大変なことですよ。そういう動きになっておる。そこで日本は非常に危いということを、いよいよ痛感しました。

その際、自分で解決がつかずに問題になったのは、マルクスがまだほんとうに理解できないから、ほんとうの批判ができない。これに対してドイツ、フランス、イギリスの学者はどういうふうに考えているのか、その態度を知りたい。

というのは、日本の西洋史というのは不思議な学問ですね。私も実に不思議に思ったが日本の西洋史の学者というのは全部受け売りなんです。公然と言っておったのは今井登志喜さんで、西洋史のほうで学位論文が書けるはずはない。われわれは向こうの学者の書いたものを読む以外に研究はできない、ということを彼は公然と言っていた。そういう学位論文のようなものは、西洋史のものであっても日本の歴史の中で書くほかはない。それをやったのは大類博士で、大類さんは「日本城郭の研究」であって、西洋史の研究ではないんです。今井さんも日本宿駅の研究をやっていました。

ところが私はそんなことは毛頭思わない。東洋史でも西洋史でもみな日本人自身の目で日本人の魂でこれを解決していくということではなくてはならない。それをおやりになったのは白鳥先生で、私が先生に本当に傾倒したのは、史記の中に大苑国というのが出てくるんです。カスピ海のほとりにある国で、そこに貴山城というのがあ

る。それが今のどの地点であるかということの研究を、一年間教わった。実に精緻を極めた研究で、どうしてもここでなくてはならないという地点を定められた。これに反対するものはいま学士院の副院長をしておる、フランス文学の桑原武夫の親、桑原隲藏氏。当時、京都大学の東洋史の教授で別のところを指しておる。それに対してそんな説はない、こうだということを先生は教えられた。その研究法を私どもは非常にありがたく教えてもらったのですが、白鳥先生は一年間それを講義されて、いよいよ試験になった。

試験問題は、どんな問題が出たと思いますか。「大苑国の貴山城はどこなりしや」というんです。こっちは聴いておるから、桑原教授はこういう説を立てておるが、これはこういう点で成り立たない。これはこうでなくてはならないということを書いて百点ですわいな。愉快なもんでね。それは日本人の目で見直してそういうところを開拓していくということ、痛快を極めたもので、ハンガリア人が感激したのも当然だと思っんです。

ところが、西洋史はいっこうそれがない。私がいちばん疑問にすることは、日本にさしあたったの問題はロシア革命で、その影響を受けて日本はいま倒れかかっておる。この次は日本革命だということへきておるでしょう、そこでロシア革命に目を付けなくてはならない。ロシア革命というのはフランス革命から出ているんです。このもとはフランス革命にある。フランス革命はそれもとへいくとアメリカ革命である。これは西洋史の大筋ですよ。これを理解しないでは、世界の今日の混乱は理解できないと同時に、日本史の問題

なんです。日本の歴史はこれらの問題を抜きにしては解決できない
ということを私は考えた。これは私が西洋史のほうからにくまれる
ひとつのもです。俺の領分を侵すという考えでしようね。しかし、
そんなことはない。フランス革命がわからないでは西園寺公望がわ
からない。西園寺公望がわからなくては、大正・昭和の日本の政治史
がわからない。それからロシア革命がわからないでは、大正・昭和
の日本の混迷がわからない。これはみんなわれわれの手でやるべき
だという考えなんです。

そういうことを考えていって、ずっと世の動きを見ると日本は非
常に危い。そこでドイツへ行つて硯学大家に会つて討論して、心あ
る人はどういふ態度で歴史を見ておるのか、それでぶつかつたでし
ょう。ところが実に幸せなことには、どの方も胸襟を開いて核心に
触れる話をみんなしてくれた。そこで私も非常に自信を得、そして
彼らが真剣に自分の道を開拓していく態度に感歎した。

マルクスというものも、ドイツで一生懸命伝記を読み、マルクス
を理解するためにはユダヤの歴史を知らなくてはならないので、ユ
ダヤの遺跡をずつとまわつた。それからフランスへ入つた。

フランスへ入つていちばん大きな問題は、リベルテ、エガリテ、
フラテルニテが革命の旗じるしで、フランスの書物はどれを見ても
そう書いてある。一七八九年のフランス革命はリベルテ、エガリテ、
フラテルニテを旗じるしとして立ちあがり、それが順次成功をおさ
めて、ついにこれまでの君主専制を廃して、民主共和の国にした。
これを謳歌している。これがフランスの歴史の大筋ですわ。日本の

西洋史の先生はどなたも全部それをそのまま踏襲して、何ら疑うと
ころがない。

私どもは箕作先生の教えを受けたんですが、箕作先生ご自身には
非常な感謝をし、感心しておるけれども、先生のフランス革命史と
いうのは、フランスの公式の革命史をただ述べ伝えるだけで、それ
以上は一歩も進んでいない。

私はこれは嘘だと思つた。この原則的な建前は、フランスの今日
の立場を是認するために、あとからそういうふう^にに立てたものであ
つて、これは本物ではないという判断をした。これは勘ですわ。日
光の研究と同じです。そこでフランスへ入つて、十しかフランス語
がわからないものが、寢食を排するほどに苦勞してフランス語を習
つたのは、この問題を解決するためなんです。そこで革命当時の古
文書を押さえなくてはならない。できあがつた書物はやめて、オリ
ジナルな資料の検討をやつたんです。

幸いなことに古文書はまだいくらでも残っている。若いですから
ね。一七八九年なんていうのはこの間のようなもので、この家と違
いはないんだから、私から見ればこの間みたいなものです。それで
街を歩くところ、買えるので随分買つた。幸い私は三百円金を貰
つていて、遊ばないんだからね、カフェへ行か
ず、酒や女には目もくれないから金は余つていたのでそれが買える。
自分でそれを持たなければ、いざというときにこれだということが
言えなくてはならない。それからあそこには国民図書館があつて、
当時の革命文書があるんですよ。それを自由に見せてくれたので、

毎日行つて一生懸命写すんですわ。

それで、インキ壺があつてそれが非常におもしろい。私らが大学の講義を聴いた時は普通のインキ壺に網が付いていて、その網を腰へ挟んで行つただけけれども、フランスにはそれを入れる筒があるんです。ちよつと茶筒のような木の筒があつてそれは蓋をする中がバネになつていて、キュツと締めると蓋が開かないようになつてゐる。そういうものがあるんです。私は記念にまだ持つていますが、それを持つて行つて一生懸命写した。

それからさらにバリ、オルレアン、アルル、アビニオンをずっと回つて、至るところ古文書を漁つた。買えるものは買う、図書館にあるものはみんな写すということですと回りました。フランス滞在は五ヶ月ほどでしたが、資料は十分収集した。そこで今度は向この学者との討論です、

その時分向こうでいちばん老大家で、フランスの至宝というものがセーニョボーでした。先生をお訪ねした。これは白髪で赤いガウンを着ておられました、年をとり過ぎていて好々爺なんです。お尋ねしますが、リベルテ、エガリテ、フラテルニテはいつからですか。一七八九年です。ああ、そうですとということ、こんな老人とけんかをしてもしようがないから、敬意を表して帰りました。

それからサニヤックというのがフランス革命史専門で、パリで革命史を講義していたので、この人に会つて聞いた、やつぱり同じことをいう。例のノン・マダムはそのとき出たんだ。それは違つたと言つても彼も頑として聞かない。私も譲らないので、これはそのまま

けんか別れです。

それから歴史家の中でも革命ばかりやつてゐる人がゐるんです。自分でフランス革命という雑誌を主宰しており、いちばん好きな人物は、私が国史のほうでいえば北畠親房公ですが、彼が理想とするのはロベスピエールなんです。ひどいのがあると思つて、それからそのロベスピエールに会いに行つた。ところがこの人は優れた人でした。私は非常に驚いて、今日はどんな乱暴な男かと思つてきたんだが、こういう人がいたのかと思つた。この人はすらりとした紳士で、温顔をもつて私を迎えてくれた。そしていまの話しに入つて、一七八九年七月十四日、バスチーユの獄を破壊した日はリベルテのみ。それから一七九二年八月十日、チュイレリ宮殿の襲撃の日にはエガリテが加わつて、ここで旗じるしがリベルテ、エガリテの二つになつた。そして一八四八年にやつとフラテルニテが加わる。当然そうでなくてはならない。大変な違いでしょう。五十年の開きがある。この最後の点が私には明確でなかつたので、リベルテはこのときから、エガリテはこのときからと思うがどうですかと最初に聞いた。サニヤックで懲りたから、またノン・マダムをやつてはいかんから、向こうがいう前にまずこのことを言つた。

彼はニコニコして聞いていて、あなたのいう通りですと。「それではお尋ねしますが博愛はいつからですか」「四十八年です」「だれですか」「ラマルティース」やつぱり偉い人ですね。彼はおそらく外へは言わないのだからと思つた。フランス国としての正式の見解は、最初から自由・平等・博愛だということであつた。

そうしないとあの国は崩壊する。国家成立の根本精神が動揺するから言わないのだと思うが、私には全部正直に言ってくれた。そしていろいろな本をくれました。この人はその意味では非常に感謝しておるんです。ラマルティエヌにはじまるまではなかなか私は断言できなかった。いろいろ出てはきていますけれども、それだけ明確に言えなかったが、この人がこうですよと教えてくれた。これは私にとっては実に鬼の首を取ったようなもので、フランス革命の本質というものをこれで完全に理解することができた。

それからさらにアメリカも入るんだけど、そこまでくると日本の国内の動揺、動乱というものの本義をつかみ得た。ここで初めて理論が立ち得るんです。中途半端なことを言ったのでは、日本の国がいま亡びるかどうかというところで、大動揺、大混乱に陥って寄りどころがないときに、自分の基盤というものをしっかりとしなくてはならない。それができた。

それからそういうときに非常に感銘を受けたのは、前にベルリンでマイネッケ先生をお訪ねしたときに、先生の親友で経済学のほうで有名なトレルチ先生がおられるんです。私はトレルチを非常に好きなんです。マイネッケ先生と話をしておったところ、トレルチは自分の親友だが、トレルチもいつもここへ訪ねてきて、あなたのそのいすに座ったんだといわれて、私にとっては非常に感銘でした。こういう優れた人物と会い、それと何らかの近づきを得たということとは非常な感銘で、自分はここで初めて立ち得るということに自信を得たんです。

とにかく日本は非常に危いということは前から考えておった。しかし、危くても自分にたたかい得るだけの力がないということは、非常な悩みであった。いよいよここまでくると戦い得る。そこで急いで短縮して帰ることになった。前のままでいけば五年の三月に出たのだから、七年の春にならないと帰れない。それまでゆっくりしておることはできない。それで病氣ということにしたんですが、病氣も嘘ではない。弱いんで、ドイツなぞで病氣をしたらひどい目に合う。どこでだったか風邪をひいて医者にかかった。薬をもらって大体治ったからそれで行かなければよかったものを、日本の癖で医者というものには治るまで診てもらって、これでいいといわれると安心するので、二度目に行つたんです。するとわしののをこうなでて、ああ、治った、これでよかったというんです。それで何ドルか取られた。(笑) ひどいもんでね。びっくりしたのしなのって、あんだ、あんな取り方つてないと思うけどどうにもしようがない。

それからベルリンの宿のおばあさんの話でも、とにかく医者にかかったり、向こうで病氣したらひどい目に合うんです。見るも無残で非常に高い。そして乱暴ですわ、日本の医者のようにはいかない。一緒に行っていたのが大野中学の一年上級で東大を私と同じに出た鰐淵さんで、彼は医学部で四年だから私の一年先輩だったけれども東大を出たのは一緒です、この方がやはりドイツに留学しておられた。耳鼻咽喉科の専門であとは熊本大学の学長です。これが歯が痛いので歯を抜きに行つて帰ってきて、ドイツの医者になんかかかるものではないとしみじみいふんです。とにかく実に乱暴な抜き方を

するんですね。それは荒いですよ。

それからこれは私がやったのか、彼がやったのか覚えていませんけれども、医者ではなく散髪屋です。理髪師のところへ行行って顔をそつてもらったところが、どこかを切たんですよ。切つては困ると言つたら、こんなことをわしはしたことがないんだというんです。したことはないと言つたつて現にやつているじゃないと言つても、いや、おれはしたことがないんだつて。こんなことが日本の（聴取不能）正直なところ、日本人というのは軽蔑されていますわい。われわれがインドネシアの人に対して持つて持っているような、よくないけれども事実そういう感情がありますわいな。一段下のものだという感情がありますわい。それはなんともいえないことでしたな。

私はそういうときに、病気になる父の夢を見るんです。またお父さんの夢を見た、これは警戒しなくてはならないと思つたんですが、例の神村先生の日光浴は外国ではできないんです。素っ裸になるんですから、日本でもなかなかできるところがない。やつたのはデルフォイの神殿にお参りしたときで、だれも人はいない、日はさんさんと当たるし、これは日光浴にいいワイシャツを開けて日光浴をして気持ちよかつた。

それからローマへ行つたときに気分が悪かつたんです。夜熱が出て具合が悪い。さて医者にかかるわけにもいかず、日光浴もできない。フィレンツェではやはり具合が悪くて、あそこに一週間いました、このときには幸いなことに自分の泊まつた下宿屋で、ちようど日光浴ができる部屋があつて、日が当たるんですよ。これは非常

に助かつたんですがとにかく体が弱いものだから、死んでしまつてはしようがない。重体になるとどうにもしようがない。日光浴がしたいという気があつたんですが、これはしかたがない。

そのフィレンツェの宿ではおかしいことがあつてね。食事の時にみるとみんな食堂へ集まる。そうするとその中に主座を占める人がある。ほうほう世界の隅々からきておるんですが、その中で大将があるんですよ。女の人でノールウエーの上院議員のお嬢さんだということでした。品のいいきれいなお嬢さんで若いんですよ。とにかくそれが主賓になるんです。その人がおつて、みんなその周りを取り巻いて食事をする。その人らは美術の研究にきていて、ガラスに彩色をしたものがあるでしょう、メジチ家の装飾などを見て自分もそれを学ぶという。美術家が多かつたんです。そのときに何かの話で、日本にもそういうものをやるものもあるのが、本来の日本画とはそういうものではないと、ついうっかりして日本画の講義をしたんです。あんたは描けるかというから、描けると言つたら、描いてくれというのでよわつてね。それでしようがないから梅の絵を何かに描きました。もの笑いですけれども。困つたのはデルフォイの宿で泊まつたときに、あくる日オリンピックに行かなくてはならないが、船が夜中にでるんです。三時ごろ出るから宿を二時半に立たなければならぬので、二時半に起こしてくれと言いたいんだけど、私はギリシア語ができない。それで私の部屋の絵を描いてドアに番号を打つて、時計の絵を描いて、メイドがきてノックするところを描いて、それをそれを女中にみせたんです。そうしたらわかっ

て、二時半に起こすというから安心しておったんですが、ちゃんと二時半に起こしてくれました。

それから自信を得てフイレンツエでは、俺は描けると言い出した。それは絵にも何にもなっていないけれども、日本画というのは意味が違うんだ、こういうものだという講釈だけはしたんです。それで帰ってご奉公したいと考えたのが非常によかった。もし前のままで七年の春帰るとなれば間に合わなかったが、六年の七月に帰って、九月が満州事変です。自分が満州にいたわけではないけれども、満州事変を身をもって体験した。あのときの国内の動揺というものを自分の目で見た。みんながどうという考えでおり、どういふふうにこれに対処したかを、目で見たことが、私が乗り出すうえにひとつの基準になったんです。

しかし、地位はわずかに東大の助教授でしょう。日本の政治全体から見て私が乗りだすような状態ではない。そこで非常な苦慮があったが、六年の六月に帰って、秋に私の歓迎会がほうほうで催されたんです。その至るところで説いたことは、歴史家として欧米をみる、というような題で、大学で、たびたび話をし、ほうほうで話をした。これは非常に感銘を受けたんです。それでそのときにいろいろな方からの非常な驚きが、上のほうへあなたの考えを届かさなくてはならないという考えを、みんなお持ちになっておった。

そして七年のごく始め。当時総長は小野塚先生です。これが世にも不思議なことで、おそらく今の東大では小野塚先生と平泉というもの、何の関係もなく全然別なもので、平泉というのは軍国主義

の頑固親父で、小野塚先生は自由主義の権化のように人は思っておるかもしれない。小野塚先生の直系をもって自認するものは南原さんでしょ。ところが全然違う。これは驚いたことですね。私のいちばんの理解者は、大学の全総長を通して小野塚先生で、同時に私を援護してくださった。それは驚きですね。

七年の初めに私をお呼びになったので、上がりました。総長がいわれるのには、実は秩父宮殿下が日本政治史のご進論をご希望になつて、宮内大臣にしかるべき人選をご依頼になった。宮内大臣は一本喜徳郎法学博士で憲法学者です。一木宮内大臣は自分を呼んで、ひとつ人選を頼むといわれた。そこでじぶんはいろいろ調べたが、君以外にはいない。君を推挙したいと思う。これは上に教授もあり、先輩もあるから、あんたとしてはこれを受けにくいと思うだろうけれども、もしこれを君が断わってくれると、自分としては東京帝国大学としては人がございませんと行って、ご辞退する以外に道はない。そこでこれは断わってくれるな。つまりは、東京帝国大学の名誉のために、君はほかのことを顧慮せずしてこれをお受けしてもらいたい。言い換えると、これは君に対して頼むのではない、総長として命令するといわれたんです。

私はこれを聞いて非常に驚いて、思いもよらんことだった。私は卒業したときにほうほうから口がかかったでしょう。宮内関係もあつたがそれを私は断わつた。なぜ宮内省に近づくことを好まんかといえ、今日の時勢で皇室に忠義を説くなんていうことは、だれも人の好まざるところで、みんな反感を持っている。天皇に対して尊

敬の念を持つておるものは大学に一人もおらない。これはほとんど断言してよい。高等官一等、二等の教授は正月の二日には参賀し得る資格があり、本来いえば義務になつてゐるはずで、参賀するのは当たりまえなんです、ところがあとで私も高等官一等になつて初めてわかりましたが、東大の教授にして喜んで参賀しておるものはない。これはひとり東大のみではない。文部省でも大蔵省でもみんなくるはずですが、こない。きておるものは陸海軍だけなんです。これは少将からくるのが、大将は親任官ですからわれわれと日が違う。これは元日ですかいな。私はあがつたことがないからわからんけれども、われわれ高等官一等というのは中将相当ですわ。それは二日の朝かと思ひますが、だれもきておらん。行つてみると陸海軍だけである。そのほかに文官はだれかきておるかというのだれもおらん。ただ一人、いつでもきておられる文官は木戸侯爵です。私どもは肩身が狭いが、陸海軍というのは勲章をずらつと並べて剣をつつて威風堂々としておる。文官というのは寂しいもんですわいな。フロックコートを着てしょぼんとしておるでしょう。行くといつも木戸侯爵と話をしておるんです。

その時分に私は体が弱いものですから、手はしもやけなんですよ。全部しもやけでみんな包帯がしてあるんです。どうしたんですつて木戸さんが聞かれる。私は朝、庭で落葉をたいてあたるのが癖でありまして、それをやるものだからしもやけができました。そんな仕事をしておるのかと笑つておられたんですが、それを今でも思い出します。そんなことであつてだれもほかの人はきておらん。教授

諸公は皇室へ近づくことを、よそに対してはそういう身分の高いということ誇りとされるかもしれないが、忠君の姿勢はあまりないように見える。学生に至つては天皇陛下とか天皇という言葉を使わない。天ちゃんです。これはかなり失礼なことばですね。みんなそれを笑いごとにしておつたという時代です。それはまだいい。自由主義者のやることで、もつとひどいものは、もつとひどいことを考へていたでしょう。共産革命を企図するものがおる。みんな若者の熱情が下町のほうのセツルメントの活動に向いてるときです。そういうときに私が宮内省と関係を持てばあれは阿諛便佞の徒と思われましょう。私はそう思われることを好まない、そうなつたときはおしまいだから、宮内省から何らの恩恵に浴していない立場に私はいたい。今日、日本の国を救おうとするものは、野に叫ぶものでなくてはならない。宮中へ入つてしまつたらおしまだらうという根本の考えが私には強い。それは黒板先生の、平泉、おまえだけはどこにも就職するな、月給を貰わなくても、何もしなくても食えるというだけの信念を持て、そこまできたときに天下を相手にたたかえるんだといわれた。それと相通じて私は宮内省へ入ることを好まなかつた。これは宮内省へ入るのではなく、ご進講ですから、小野塚総長のこの懇切なことばに打たれて、お受けしたんですよ。それは何とも言えぬあたたかいことばでしたね。そこでご進講申し上げることになつた。これが初めに二年というお約束でした。毎週一回、水曜日の夕べ二時間、それはあとで延期を願ひ出て二年半になりました。ご進講がはじまつたのが昭和七年。それは入つていないでし

よう。表向きに辞令のあるようなことではないんです。

○ それは宮家からの依頼というか……。

平泉 宮家のことはすべて宮内省で統括されていて、宮内省からそういうことを内々お言い付けになったんでしょうね。これはなにをはずれますね。三月二十三日に講義が始まって、二年半続いた。

(校訂 照沼康孝)